

たはら 探訪 歴史クラブ 其の68

TAHARA History Inquiry Club

ハマカンゾウが咲く渥美半島

8月も終わりのある日、伊良湖岬を訪ねました。伊良湖クリスタルポルトから灯台に向かって、潮風を浴びながら歩きました。ここの遊歩道沿いには、伊良湖の歌人・糟谷磯丸(1764~1848)の歌碑が並んでいます。山側を見ますと、迫るような急斜面に咲くハマカンゾウを見つめました。

皆さんはハマカンゾウをご存じでしょうか。ユリ科のノカンゾウ(これを「萱草・わすれぐさ」と言います)に似た、橙色の鮮やかな



伊良湖岬灯台周辺のハマカンゾウ

花をつける多年草です。田原市では伊良湖岬を中心とした表浜、白谷から江比間までの海岸急斜面に分布しています。伊良湖のハマカンゾウは風に立ち向かうかのように咲き、その姿と数は実に感動的です。そのとき建築家でもあり、詩人の立原道造(1914~1939)の文章を思い出しました。

昭和11年9月、立原は友人の杉浦民平(1913~2001)を頼って渥美半島を訪れました。その際に「私は伊良湖岬に杉浦民平を訪ねた。すると杉浦民平が僕にゆふすげの花を岩かげに教えるやうな運命になっていた。信濃路を別れて十日あまり、明るい海光に曝(あび)されつづけた私の眼に、おなじ名の花とおもへない、

みすばらしい、はじめの花の姿が強いられた。・中略・その花は橙色に近い黄の花びらを一枚一枚づつうづうしい位に厚ぼったくふくらませ、一茎に幾花もむらがつっていた。」と、ハマカンゾウを恨めしくつつつています。一方、杉浦は「伊良湖の萱草がそんなに呪わなければならぬのか。太平洋から濃厚な塩気を含む強烈な潮騒に吹きさらされてきた以上、そういう色と形をとらねば生きて来られなかつたのである」と反論しますが「がしかし、立原の中に、同じ名前、おそらく植物学にもほぼ同じ性質を帯びた野草がかくも醜い姿で存在することを許せなかつたという点について、わたしは共感する」と、立原の気持ちに理解を示しています。

ゆふすげはハマカンゾウに似ていますが主に山地に生えています。立原がハマカンゾウをゆふすげとしたのは、あえて信濃のそれと対比するためでしょう。しかし、杉浦も同調するほどハマカンゾウは色も形も醜いのでしょうか。たとえそうだとしても、彼らの心を動かしたことは事実です。ハマカンゾウの姿を見ると、彼らの心情を表現するために犠牲になったとしか思えないのです。

その他、渥美半島のハマカンゾウを題材とした作品を紹介しましょう。
長塚節(ながつかたけし)「しほさいの 伊良胡が崎の萱草(わすれぐさ) 名みのしづぎに ぬれつゝぞさく」
白田亜浪(うすだあゐろう)「雷名残り 雲吹く朝の 浜甘草」
次に「椰子の実」記念碑がある日出園地に向かいました。ハマカンゾウ見学スポットのひとつです。ここは幕末、異国船対策のため、大垣新田藩が砲台を設置した場所です。当時の人はこのような絶景、ハマカンゾウの花にも気づくことなく、現れるあてのない異国船の姿を追っていたのでしょうか。ハマカンゾウを通じて思いをはせた夏の一日でした。
(増山)



日出園地のがけに咲くハマカンゾウ

文化財課 23局3531